

両側性変治唇裂の2次修正術

田中 徹 小倉 義郎 岸本 浩之
谷 互 吉田 萬子 黒住 望

岡山大学医学部耳鼻咽喉科学教室（主任：小倉義郎教授）

（昭和51年7月13日受稿）

緒 言

両側性唇裂の術後変形としてわれわれのしばしば遭遇するものに whistling deformity があり、その修正術に関しては諸家により種々の方法が発表されている。われわれはこのような症例に対して簡便な方法を工夫して手術を行ない好結果を得たので、若干の考察を加えて報告する。

症 例

13歳、男児。

主訴：唇裂術後の口唇部の瘢痕と変形。

既往歴：生来、両側性不完全唇裂および不完全口蓋裂あり。生後2ヵ月で唇裂形成術（テニソン法）、また、3歳で口蓋裂形成術を受けた。

局所所見：写真1に見られるように中間顎赤唇部

が菲薄なため、口を閉じた際にも門歯が露出する変形を残している。また、このために発音も部分的に不良であった。

手 術

この症例に対し、上口唇の組織の不足を補うため、下口唇よりの遊離粘膜弁移植術を行なった。

まず、瘢痕部切除をかねた切線により中間顎赤唇部を左右上口唇より離断する（図1-A）。同じく中間顎赤唇部に続く口腔前庭粘膜を歯齦縁で切断して赤唇部皮膚・粘膜弁を作り、これを上方へずらせて左右の赤唇部とサイズを合わせて縫合する（図1-B）。口腔前庭部にできた創面Wを下口唇より採取した遊離粘膜弁Gで被覆した。図1-Cは上下の創面を被覆・縫合したところを示す。写真2は術後10日目の所見で口の閉鎖、上下口唇の均衡の良くなったことが分かる。

考 按

両側性変治唇裂の2次修正に関しては種々の問題点がある。

本例に見られたような whistling deformity の修正術としては Abbe-Estlander 法や tongue flap 法のごとく上口唇以外の組織を使う方法、また Kapetansky²⁾ や Chong³⁾ の報告のように左右から中間顎部へ組織を移動させる方法、V-Y法を用いる方法⁴⁾ などがある。Gillies and Millard⁵⁾ は有茎粘膜弁を用いた。

われわれの方法は粘膜および粘膜下組織の free composite graft⁶⁾ を使用する方法的応用であるが、症例に適合させた若干の工夫が加えられている。本法は手技が簡単であり、術後管理も容易であり、適正な症例を選択すれば利用価値の高い方法と考えら

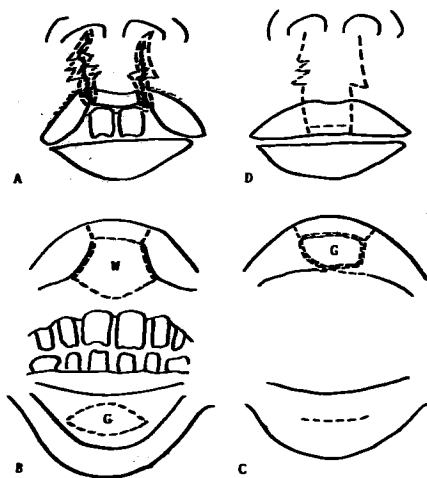
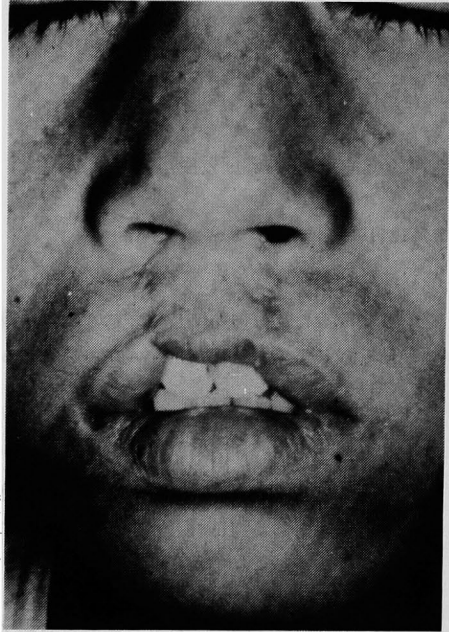


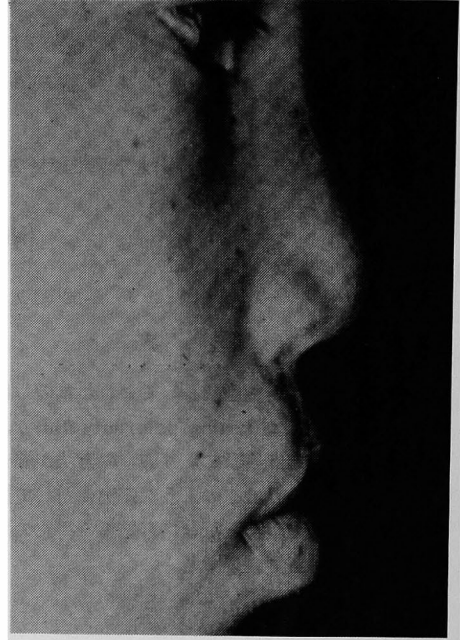
図1 両側性変治唇裂の形成手術

写真1 術前所見

田中他5名論文附図



A. 正面

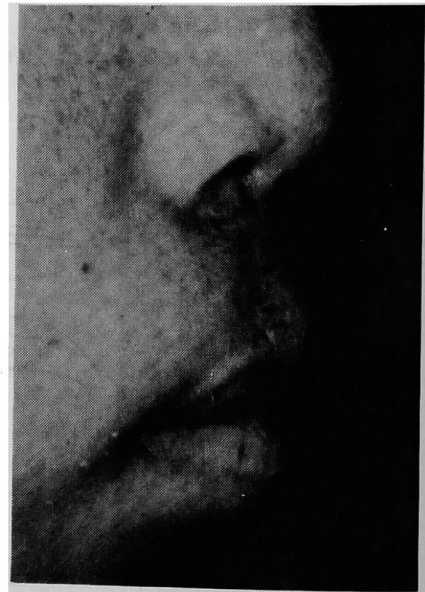


B. 側面

写真2 術後所見



A. 正面



B. 側面

れる。

た修正手術の経験を述べ、若干の考察を加えた。

結 語

Whistling deformity の下口唇遊離粘膜弁を用い

本論文の要旨は昭和49年9月、第17回日本形成外科学会総会において発表した。

文 献

- 1) Guerrero-Santos, J.: Use of a tongue flap in secondary correction of cleft lips. *Plast. and Reconstr. Surg.*, **44**: 368—371, 1969.
- 2) Kapetansky, D.I.: Double pendulum flaps for whistling deformities in bilateral cleft lips. *Plast. and Reconstr. Surg.*, **47**: 321—323, 1971.
- 3) Chong, J.K., and Winslow, R.B.: Simple technique for correction of "whistling" deformity in repaired cleft lips. *Plast. and Reconstr. Surg.*, **48**: 84—85, 1971.
- 4) Robinson, D.W., Ketchum, L., and Masters, F.W.L.: Double V-Y procedure for whistling deformity in repaired cleft lips. *Plast. and Reconstr. Surg.*, **46**: 241—244, 1970.
- 5) Gillies, H.D., and Millard, D.R.: *Principles and Art of Plastic Surgery*. Little, Brown and Co., Boston, 1957.

**Correction of whistling deformity in repaired cleft lip
by**

**Tohru TANAKA, Yoshio OGURA, Hiroyuki KISHIMOTO,
Wataru TANI, Kazuko YOSHIDA & Nozomu KUROZUMI**

Department of Otolaryngology

Okayama University Medical School

A simple technique for secondary correction of "whistling deformity" in bilateral cleft lip patient was presented.

A patient, 13-year-old boy, had primary plastic surgery on his bilateral cleft lip at the age of two months, and left whistling defect as a sequela.

He had the secondary repair by modified free composite graft procedure from the lower lip with satisfactory results.